

『隋煬帝艶史』に於ける『隋遺録』『海山記』『開河記』『迷楼記』の襲用について

河野, 真人
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9636>

出版情報：中国文学論集. 28, pp.51-67, 1999-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

『隋煬帝艷史』に於ける

『隋遺録』『海山記』『開河記』『迷樓記』の襲用について

河野真人

はじめに

中国史上屈指の悪人皇帝とされる隋の煬帝。彼は運河開設など数々の歴史的業績を残す一方、そのスケールの大きな悪逆非道ぶりを様々な文学作品に見せてきた。『隋唐演義』や『説唐』などを初めとする隋唐時代を扱った講史小説群などはその最たる例であるが、この様な隋煬帝に取材したもののうちの一つに『隋煬帝艷史』という作品がある。この作品は隋煬帝を中心に据えてその生涯を描いており、彼の故事を研究する上で、また明清の講史小説史上に於いて、極めて重要かつ有益なものといえる。

さて多くの書や先行論文に於いて、この『隋煬帝艷史』が『隋遺録』『海山記』『開河記』『迷樓記』等の小説作品を襲用して成っている事については既に言及されている¹⁾。しかしながら、その襲用の実態については必ずしも深く追求されているとは言えない。そこで小稿では、襲用の実例を挙げて実際に比較検討する事で、その実態について明らかにし、『隋煬帝艷史』の成立、そして隋煬帝故事の演変についての私なりの考察を試みたい。

一

『隋煬帝艷史』²⁾について、作品の概要を明刻人瑞堂刊本に拠って纏めると、以下のようになる。

『隋煬帝艷史』に於ける『隋遺録』『海山記』『開河記』『迷樓記』の襲用について（河野）

○名称について

全称は『新鐫全像通俗演義隋煬帝艷史』と呼ぶ。後の清代の刻本では『絵図風流天子伝』と題するものも存在する。通常は『煬帝艷史』や『隋煬帝史』、又はただ単に『艷史』と呼び慣わす。(小稿では以後『艷史』と呼ぶ)

○作者について

巻頭には「齊東野人編演」「不経先生批評」の署名があるものの、この「齊東野人」が誰を指すかは不明である。「齊東」とは今の山東省青城県の西辺を指すが、この土地が作者にとって何らかの縁が有ったのではないかと考えられる。もう一つ「齊東野人」に関して連想されるのが『齊東野語』の存在である。ただ、筆者が『艷史』を翻訳した限り、作者が「齊東野人」を名乗る際に、何らかの形で『齊東野語』を意識したという痕跡は見受けられない。また、魯迅の『唐宋伝奇集』「稗辺小綴」に拠れば、「右四編皆……馮猶龍撥入隋煬帝史、遂彌復紛傳于世。」とあり、その作者を明の馮夢龍としている。しかしながら、この説は根拠がはっきりしていない。案ずるに、これは馮夢龍の『醒世恒言』中に隋煬帝を扱った箇所が有り、しかも『艷史』の序に付された年代が彼の生きた世代とほぼ一致することに起因しているのではないだろうか。

○成立年代及び成立地域について

成立年代については、序に崇禎辛未(崇禎四、一六三二)の年号があり、これに拠れば明末の頃の作であることが推測できる。成立地域について、まず考えられるのが、作者と思われる「齊東野人」の「齊東」に当たる地域である。次に考えられるのが、「艷史題辭」を著した「樵李友人委蛇居士」と言う人物の「樵李」に当たる、今の浙江省嘉興府付近の地域である。しかし何れも決定的な証拠はなく、成立地域に関しては未詳と言わざるを得ない。

○構成について

『艷史』は全八巻四十回(各巻五回)から成る。各巻それぞれ題名に合わせて半葉の絵図と半葉の賛辭の組が二組ずつ付されており、その絵図は非常に精妙である。また、首には順に笑痴子「隋煬帝艷史序」、野史主人「艷史叙」、委蛇居士「艷史題辭」、「艷史凡例」十一條(版本によって条数が違うが内容は同じ)、「隋艷史爵里姓氏」が、また各巻末には総評(約百〜二百字程度、巻頭の署名「不経先生」によるものと思われる)が付されている。

○版本について

詳しい研究及び説明は別の機会に譲りたいが、『艶史』の一番有力な版本は明刻人瑞堂刊本である。正文半葉九行×二十字の版式を有し、前に述べたように半葉絵図と半葉贅辞の組み合わせ計八十組が付されている。所蔵は内閣文庫、東京大学文学部、大連市図書館など多数存在する。また現在の時点では他に、人瑞堂刊本と同じく半葉九行×二十字だが、封面及び絵図を失するもの（国会図書館など所蔵）、半葉十行×二十二字で絵図二十葉のもの（天理図書館所蔵）、そして行款不明の明刻本、清覆刻本などが存在する。

以上が『艶史』の概要である。『艶史』の内容については、その作品成立と深く関わっているので、後節で改めて述べることにする。また以下に『隋遺録』『海山記』『開河記』『迷楼記』の襲用について考察するので、予めこれら四作品について作者及び成立年代について確認しておく。

『隋遺録』は別名『大業拾遺記（又は拾遺録）』『隋朝遺事』『南部烟花記（又は烟花録）』とも呼ばれているもので、唐・顔師古撰とするテキストがあるものの、偽作の可能性が高く、作者及び成立年代については未詳である。『海山記』『開河記』『迷楼記』は、別名として冠に「煬帝」もしくは「煬帝」が付されたものがある。作者については、三者共に唐・韓偓撰とするテキストがあるものの、これまた偽作の可能性が高く、未詳である。成立年代については、『海山記』のみ宋・劉斧の『青瑣高議』に収められており、これに拠れば、宋代以前の成立と推測できる。残りの二者も、文面を見る限りでは『海山記』と同一人物の手によるものであると考えられ、これら三者の成立年代を或る程度限定することが出来る。

二

明代の小説『隋煬帝艶史』と『隋遺録』『海山記』『開河記』『迷楼記』とは多くの共通部分を有する。先ず表A（後掲）について、これは『隋遺録』『海山記』『開河記』『迷楼記』に収められている故事が『隋煬帝艶史』のどの『隋煬帝艶史』に於ける『隋遺録』『海山記』『開河記』『迷楼記』の襲用について（河野）

部分に収められているかを示したものであるが、此処から分かることについて、以下に纏めてみることにする。

①『艶史』に取り込まれている故事について

表の左側の欄にはその作品に収められている故事を全て挙げたが、それらの故事が『艶史』の何れかの部分に収められていることが分かる。これは『艶史』に対して、これら四小説が如何に深い関係にあるかを物語っているものであり、『艶史』の作者が、これらの作品を積極的に作品中に収めようとした態度が窺えるものである。

②共通部分の並び方について

表の右側の欄で示す『艶史』の巻数に関して、その並びに注目すると、それぞれほぼ順番通りに並んではいるものの、若干のずれが見られる。特に顯著なのが『海山記』下巻の最初の三故事であり、これらは二つの部分に分けられ、『艶史』の違う場所に存在している。実はこれらの故事は、このまま『艶史』に取り入れると、時間を遡ったり大幅に踏み越えたりする矛盾が生じる。従って二つの部分に分け、前者を伏線として、物語の比較的前半部分に配置したのではないかと考えられる。

また、注意すべき点として、『艶史』に配置されている場所が著しくずれている故事の存在がある。具体例を挙げると、『隋遺録』「御女車の献上」、『開河記』「長城の修築」、『迷楼記』「侯夫人の自殺」であるが、この「ずれ」に関して、実は明確な理由が挙げられない。というのも、これらの故事が本来配置されるであろう箇所（「御女車の献上」は卷二十六、「長城の修築」は卷二十四、「侯夫人の自殺」は卷三十三の辺り）に在っても余り違和感はなく、取り立てて他の場所に配置する必要性を感じられないからである。これは『艶史』成立の不明な部分である。

以上、並びについて多少のずれが見られるものの、『艶史』と『隋遺録』等四小説との関係が、極めて密接である事が分かる。では逆に、『艶史』から見た『隋遺録』等四小説について考えるとどうなのであるか。表B（後掲）は、表Aとは逆に、『艶史』をベースとして、『隋遺録』等四小説との共通部分について調べたものであり、同じく要点を纏めると以下のようになる。

①共通部分の占める割合について

『艶史』に於いて、大半の部分が四小説の何れかと共通部分があることが分かる。表の右端の欄に示しているように、共通部分が無いのは全四十回に対し四回（第三回、五回、八回、二十二回）であり、一回を題名に沿って二つの部分に分けても、全八十箇所に対し二十二箇所となり、その共通部分の割合の大きさが分かる。但し此の割合は、あくまでも数の問題であって、決して分量の問題ではない。此の事に関しては後に詳しく触れることにする。

② 共通部分の場所について

共通部分の場所に注目すると、『隋遺録』等四小説についてそれぞれ比較的密集して共通部分が存在していることが分かる。すなわち『艶史』の作者は、これら四小説を繋ぎ合わせるような形式（簡単に言うなら『海山記』↓『開河記』↓『隋遺録』↓『迷楼記』↓『隋遺録』↓『海山記』という順番）で襲用したのではないかと推測できることになる。また共通部分はその殆どが相補的に存在している。

③ 共通部分が重複する箇所について

共通部分のうち五箇所では、複数の小説に渡って共通部分が存在している。このような場合、作者はどのような襲用をしたのであろうか。まず『艶史』の当該箇所が複数の故事から成っている場合がある。それが第二十七回と三十七回の場合であり、第二十七回については『隋遺録』では「江都への出発」に対し、『開河記』では「楊柳の植樹」、そして第三十七回については、『隋遺録』『海山記』では「陳後主との出会い」に対し、『迷楼記』では「煬帝の落胆」が描かれており、完全なる重複ではないことが分かる（但し、第三十七回に於ける『隋遺録』と『海山記』については当てはまらない）。その他の部分に関しては、およそ同じ故事に関して複数の小説で描かれている事になるが、その襲用の仕方については次のように考えられる。

当該箇所（第三十七回の『隋遺録』と『海山記』も含む）に関して改めて気付くのは、必ず一方に『隋遺録』が絡んでいることである。そこで、『隋遺録』ともう一方の小説とを見比べてみると、『隋遺録』でない側の小説（具体的には『海山記』『開河記』『迷楼記』）は、『隋遺録』より比較的内容が厚くなっている。後節に於いて説明することになるが、『艶史』は『隋遺録』等四小説に比べて遥かに内容が厚くなっており、従って作者は少しでも内容の厚い作品を主体に用いて襲用したのではないかと考えられる。

『隋煬帝艶史』に於ける『隋遺録』『海山記』『開河記』『迷楼記』の襲用について（河野）

④ 共通部分が存在しない箇所について

表の右端の欄に注目すると、共通部分の無い箇所も無視できないほど存在している。それではこの様な箇所は如何なる過程を経て創作されたのであろうか。此の疑問に対する幾つかの可能性を以下に考えてみる。

先ず第一に挙げられるのは史書の類である。例えば第三回などで取り上げられている宣華夫人と煬帝との故事は『資治通鑑』巻百七十九に収められているなど、『隋書』並びに『資治通鑑』を手本にして描かれたと思われる箇所が幾つか存在する。但し、描写の違いは明らかであり、『艶史』にとつてこれら史書は故事を提供する種本的存在にしか過ぎない。従つて、この事に関して襲用という言葉を使うのは躊躇ためらわれる。

第二には、『隋遺録』等四小説以外の先行作品である。今回特に『隋遺録』等四小説を取り上げて『艶史』との関係を考察しているが、勿論それ以外にも隋煬帝故事を扱った文学作品は存在しており、それらが『艶史』創作に際し、何らかの関わりを持った可能性は十分有り得る。ただし前の史書同様、その存在は種本レベルに留まっているのだが、『隋遺録』等四小説と同等か、それ以上の関係を持った作品の存在は十分考えられ、そのような作品（今現在散佚している可能性も極めて高いだろうが）が共通部分の無い所を埋めていく事にも成り得よう。そして此処には、文字化されなかつた民間伝承の類も含まれ得る。

第三に重要なものが、『艶史』の作者による独創である。『艶史』を創作する際に、『隋遺録』等四小説を襲用しつつ（無論その他の文学作品も大いに利用したであろう）、間に適宜作者の独創を差し挟んで繋ぎ合わせたという事は十分考えられる。現段階で『隋遺録』等四小説と共通部分の無い箇所の内どれが作者の独創であるかという事は確定し難いが、作者の独創によつて成立した部分は、恐らく作者の『艶史』に対して、そして隋煬帝そのものに対しての態度が如実に表れているものと考えられ、『艶史』の中でも極めて重要な部分と言えよう。

三

以上、故事の共通部分という観点から、『艶史』と『隋遺録』『海山記』『開河記』『迷楼記』との関係について、

表A 『隋遺録』『海山記』『開河記』『迷楼記』と『隋煬帝艷史』との共通部分
 (『隋煬帝艷史』の番号は回数を指す)

『隋煬帝艷史』に於ける『隋遺録』『海山記』『開河記』『迷楼記』の襲用について(河野)

『隋遺録』	『隋煬帝艷史』
卷上 江都への出発	26 王令言知不返
	27 種楊柳世基進謀
木鶴を使った運河の調査	28 木鶴開河
御女車の献上	13 攜雲傍輦路風流
迎輦花の献上	25 寶兒賜司迎輦花
袁宝兒と虞世南	26 虞世南詔題詩
殿脚女の呉絳仙	27 畫長黛絳仙得寵
	28 木鶴開河
綾織物と蕭后の嫉妬	34 賜光綾蕭后生妬
煬帝と羅羅	34 不薦寢羅羅被嘲
陳後主との再会	37 鑿形失語
卷下 雅娘と薔薇の刺	33 雅娘花下被擒
迷楼宮の造営	30 幸迷樓何稠獻車
來夢兒	35 來夢兒車態怡情
東南柱上詩二首	35 來夢兒車態怡情
呉絳仙と合飲水瓜	36 賜豐果絳仙獻詩
焚草之變	39 宇文謀君

『海山記』	『隋煬帝艷史』
卷上 煬帝誕生	1 獨孤后夢龍生太子
楊素との謀事	2 蓄陰謀交歡楊素
文帝の死	4 不發喪楊素弄權
煬帝の即位	4 三正位阿摩登極
楊素の専横	6 達宮人煬帝生嗔
楊素との魚釣り	6 同釣魚越公恣志
楊素の死	9 文皇死報奸雄
西苑の造営	10 北海起三山
「望江南」八首	11 泛龍舟煬帝揮毫
卷下 陳後主との出会い	12 舞後庭麗華索詩
	37 鑿形失語
玉季と楊梅	16 明霞觀李
	37 鑿形失語
「解生」の鯉	6 同釣魚越公恣志
	16 北海射魚
王義の献上	7 受矮民王義淨身
李慶兒の悪夢	14 慶兒極君驚夢
馬守忠との別れ	26 王令言知不返
煬帝を誘る悲詩	29 靜夜聞謠
袁充による天象の觀察	38 觀天象袁充進言
王義の諫言	38 陳治亂王義死節
逆賊と罵る朱貴兒	39 貴兒罵賊
煬帝の死	40 絳寢宮煬帝死

『開河記』	『隋煬帝艷史』
睢陽の天子の氣	18 耿純臣奏天子氣
広陵の凶	17 隋煬帝觀圖思舊遊
開河に関する商議	18 蕭懷靜獻開河謀
汴水の命名	19 麻叔謀開河
大金仙人の墳墓	19 大金仙改墓

留侯廟	20	留侯廟假道 中牟夫遇神
皇甫君の洞府	21	狄去邪入深穴 皇甫君擊大鼠
陶榔兒兄弟の小兒盗み	23	陶榔兒盗小兒 段中門阻諫奏
睢陽での出来事	24	司馬施銅刑權佞 偃王賜國寶愚奸
長城の修築	14	煬帝讀史修城
龍舟の造宮と殿脚女	25	王弘讓選殿脚女
楊柳の植樹	27	種楊柳世基進謀
木鷄による調査	28	木鷄開河
麻叔謀の死	28	金刀斬佞

『迷樓記』		『隋煬帝艶史』
迷樓宮の造宮	30	幸迷樓何稠獻車
転関車・任意車の献上	30	幸迷樓何稠獻車
		31 任意車處女試春
烏銅屏の铸造	31	烏銅屏美人照艶
王義の諫言	33	王義病中引諫
侯夫人の自殺	15	怨春偏侯夫人自縊 失佳人許廷輔被収
仙人の丹薬と水価の高騰	32	丹藥留春 冰盤解燥
煬帝の落胆	37	鑿形失語
迷樓宮の最後	40	燒迷樓繁華終

表B 『隋煬帝艶史』と四小説との共通部分
(共通部分がない箇所には右端に×印を打つ)

第一回	隋文帝帶酒幸宮妃				×
	獨孤后夢龍生太子	○			
第二回	飾名節盡孝獨孤		○		×
	蕃陰謀交歡楊素		○		
第三回	正儲位謀奪太子				×
	侍寝宮調戲宣華				×
第四回	不發喪楊素弄權		○		
	三正位阿摩登極		○		
第五回	黄金盒賜同心				×
	仙都宮重召人				×
第六回	同釣魚越公恣志		○		
	撻宮人煬帝生嗔		○		
第七回	選美女楊素強諫				×
	受矮民王義淨身		○		
第八回	逞富強西域開市				×
	擅兵戈斷北賦詩				×
第九回	文皇死報奸雄		○		
	煬帝大窮土木				×
第十回	東京陳百戲				×
	北海起三山		○		
第十一回	泛龍舟煬帝揮毫		○		
	清夜遊薰后弄寵				×

『隋煬帝艷史』に於ける『隋遺録』『海山記』『開河記』『迷樓記』の襲用について（河野）

第十二回	會花陰 妥娘激寵					×
	舞後庭 麗華索詩			○		
第十三回	攜雲傍 輦路風流	○				
	剪彩爲 花冬富貴					×
第十四回	煬帝讀 史修城			○		
	慶兒極 君魘夢			○		
第十五回	怨春偏 侯夫人自縊					○
	失佳人 許廷輔被収					○
第十六回	明霞觀 李			○		
	北海射 魚			○		
第十七回	袁寶兒 賭博新寵					×
	隋煬帝 觀圖思舊遊				○	
第十八回	耿純臣 奏天子氣				○	
	蕭懷靜 獻開河謀				○	
第十九回	麻叔謀 開河				○	
	大金仙 改葬				○	
第二十回	留侯廟 假道				○	
	中牟夫 遇神				○	
第二十一回	狄去邪 入深穴				○	
	皇甫君 擊大鼠				○	
第二十二回	美女宮 中春試馬					×
	奸人林 內夜逢驪					×
第二十三回	陶榔兒 盜小兒				○	
	段中門 阻諫奏				○	
第二十四回	司馬施 銅刑惧佞				○	
	偃王賜 國寶愚奸				○	
第二十五回	王弘議 選殿脚女				○	
	寶兒賜 司迎擎花	○				
第二十六回	虞世南 詔題詩	○				
	王令言 知不返	○	○			
第二十七回	種楊柳 世基進謀	○			○	
	畫長黛 絳仙得寵	○				
第二十八回	木鶴開 河	○			○	
	金刀斬 佞				○	
第二十九回	靜夜聞 謠			○		
	清宵玩 月					×
第三十回	幸迷樓 何稠獻車	○				○
	寶荔枝 二仙警帝					×
第三十一回	任意車 處女試春					○
	烏銅屏 美人照艷					○
第三十二回	丹藥留 春					○
	冰盤解 燥					○
第三十三回	王義病 中引諫					○
	雅娘花 下被擒	○				
第三十四回	賜光綾 蕭后生妬	○				
	不薦寢 羅羅被嘲	○				
第三十五回	來夢兒 車態怡情	○				
	裴玄真 宮人私侍					×
第三十六回	下西河 世民用計					×
	賜雙果 絳仙獻詩	○				
第三十七回	水飾娛 情					×
	鑿形失 語	○	○			
第三十八回	觀天象 袁充進言				○	
	陳治亂 王義死節				○	
第三十九回	宇文謀 君	○				
	貴兒罵 賊				○	
第四十回	絳寢宮 煬帝死				○	
	燒迷樓 繁華終					○

共通部分について調査した。それでは、実際には共通部分ほどの様な描き方が為されているのであろうか。以下に二つの実例を挙げて考察してみる。

『隋遺録』卷上

時洛陽進合帶迎輦花，云得之嵩山塢中，人不知名。採者異而貢之。會帝駕適至，因以迎輦名之。花外殷紫，內素膩菲芬，粉蕊，心深紅，耐爭兩花。枝幹烘翠類通草，無刺，葉圓長薄。其香穠芬馥，或惹襟袖，移日不散，嗅之令人多不睡。帝命寶兒持之，號曰司花女。

『艷史』第二十五回

只見黃門官攔街奏道「有洛陽縣令，差人進貢異花等旨。」煬帝聽見貢異花，遂帶酒傳旨。叫取花來看。黃門領旨，隨將花傳與宮嬪，宮嬪捧到玉輦上。煬帝睜開醉眼模糊糊的一看，只見那花止有三尺來高，種在一個白玉盆裏，花朵兒生得鮮秀可愛。外邊是深深的紫色，裏邊却潔白如雪。膩膩滑滑，就如美人的肌膚一般，十分可愛。幾絲細細的紅心兒，直深含在着裏。葉圓而長，枝柔而翠，凡是一個蒂兒。上面都是兩枝花，香氣穠馥侵入。煬帝看了大喜，隨叫摘下一朵。親手拿到鼻上去嗅，原來煬帝此時，已有八分醉意，未免昏昏思睡。不想這花奇怪，嗅了一嗅，酒氣便醒去一半。再嗅一嗅，就恍然清醒起來，竟不思睡。煬帝又驚又喜道「這花原來能醒酒醒睡……（中略）……」煬帝道「這花方纔迎着朕輦而來，又都是雙朵，既沒有名。朕即替他取一個就叫做合帶迎輦花罷……（中略）……」袁寶兒原是長安進貢來御車的。這花朕取名叫做迎輦花，御車女管了迎輦花，豈不相宜。」遂叫袁寶兒將花領去。又分付道「這花苑中無第二顆，你既做了司花女，便要看管好了。」袁寶兒領旨，憨憨的笑着。把迎輦花移了進去，由此滿苑中，都叫他做司花女。（傍線は『隋遺録』と表現が類似する部分）

此処に挙げたのは、『隋遺録』卷上に収められている「迎輦花の献上」の一部分と、それに対応する『艷史』の部分である。細かい描写の違いはあるものの、迎輦花に纏わる一連の出来事に関して話の筋はほぼ合致する。また表現が類似する部分に引いた傍線部がかなりの割合で存在しており、『艷史』が『隋遺録』の似通った語句を使用

していることも分かる。この事は『艷史』創作に於いて、作者が『隋遺録』を襲用した裏付けとなるものである。ただ、留意すべきは扱っている分量の違いである。『艷史』に於いて傍線部以外の部分も多数存在しているし、傍線部そのものに関しても、表現が詳細になっている部分がある。即ち、同じ出来事を述べるのに『艷史』の方が数倍もの分量を使っており（中略部分を含めると更に『艷史』の方が長くなる）、言い換えれば『艷史』の描写は非常に詳細だと言うことになる。故に、『艷史』創作の際に襲用が為されたといっても、その方法は単なる引き写しと言うよりは、大幅な改作と言う事になるだろう。もう一つの例を見てみよう。

『海山記』卷上

煬帝生於仁壽二年，有紅光竟天，宮中甚驚，是時牛馬皆鳴。帝母先夢龍出身中，飛高十餘里，龍墮地，尾輒斷。『艷史』第一回～第二回

獨孤后：（中略）：自家依舊退入後宮。一來身重，二來勞碌了一日，三來又喫了半夜酒，不覺神思困倦，忙忙收拾睡了。纔朦朧之間，只見肚腹中，一聲響亮，就像雷鳴一般。只見一條金龍，突然從自家身子裏，飛將出去。初猶覺小，漸漸飛，漸漸大，直飛到半空中，足有十餘里遠近，張牙探爪，盤旋不已，正覺好看。忽然一陣狂風驟起，那條金龍，不知怎麼竟墮下地來，把個尾碎碎跌斷。仔細再一看時，却不是條金龍，到像一個大老鼠的模樣。獨孤后着了一驚，猛然驚醒，却是南柯一夢。心下正驚疑未定，腹中早覺有些疼痛。那些伏侍的宮人，見娘娘腹痛，知道要生產。慌做一團，急忙整備分娩之具，不多時早生下一個愛風流的太子，好淫蕩的君王。衆宮人齊聲稱賀，獨孤后見生的是個太子，又見有夢龍之兆，心下着實歡喜。（中略）：獨孤后夢龍生太子，忽然宮中宮外，一齊都亂嚷道火起。急急叫人看時，那裏是火起，却是一道紅光，自獨孤后寢宮頂中透出，直衝於雲漢之間，噴得滿天皆紅，就如霞彩一般。又聽得宮門外傳說四下閭閻村巷，牛馬皆鳴。

（傍線は『海山記』と表現が類似する部分）

此処に挙げたのは、『海山記』卷上の「煬帝誕生」とそれに対応する『艷史』の部分である。此処に関しても、

『隋煬帝艷史』に於ける『隋遺録』『海山記』『開河記』『迷樓記』の襲用について（河野）

前の「迎輦花の献上」と同様の事が言える。すなわち、話の筋は合致しており、傍線部もかなりの割合で存在し、また使用語句も似通っている。ただやはり、扱っている分量及び描写の詳細さは『艶史』の方が格段に上回っている。従って『艶史』創作の際に襲用が為された可能性は非常に高く、そしてその襲用の方法は単なる引き写しとは違い、作者の手が多く加わっている形式であるという事が言えよう。以上二箇所について比較検討したが、『隋遺録』そして『海山記』の他の共通部分に於いても、そして『開河記』『迷楼記』の共通部分に於いても同様の傾向が見られる。即ち、これまでは襲用の事実があったという前提のもとで『艶史』と『隋遺録』『海山記』『開河記』『迷楼記』との関係を見てきたが、今一度その可能性について考えてみたい。

今挙げた「迎輦花の献上」及び「煬帝誕生」という二つの共通部分から見ても分かる通り、双方共に話の大筋はほぼ合致し、そして酷似した語句を多く使うなど非常に共通点が多く、どちらかがもう一方を参考にしたとしか考えられない描写になっている（勿論成立年代を考慮すれば、『艶史』の方が利用した側になるのは明白である）。そして、注目されるのはその共通部分の多さである。前の表Aで明らかのように、『隋遺録』等四小説に収められている故事はそのほぼ全てが『艶史』中にも収められており、そしてそれらの故事が『艶史』に於いて大きな割合を占めている。以上のことからすれば、『艶史』が『隋遺録』『海山記』『開河記』『迷楼記』の四小説を襲用したと考えるのは極めて妥当な考えであると言える。

但し、襲用しているとはいえず、その方法は非常に特殊で、且つ手の込んだものであり、単なる引き写しといった体裁のものではない。ではどの様な襲用が為されたのか、今までの結果から、その方法を筆者なりに以下に纏めてみる。

a 隋煬帝故事について、『海山記』↓『開河記』↓『隋遺録』↓『迷楼記』↓『隋遺録』↓『海山記』の順番に繋ぐ。(但し『海山記』、『隋遺録』に関しては二つに分ける)

b 物語の流れに沿うように、必要に応じて故事を移動させる。またこの際伏線となる部分を前の方に配置する。

c 史書を初めとする隋煬帝を扱った書物、及び民間伝承、そして作者の独創に基づいて適宜故事を差し挟む。

d 物語の流れに沿うように、また描写が詳しく且つ面白くなるように文章を肉付けしていく。

改写の順番は必ずしもこの通りではなかったかも知れないが、少なくとも以上のような作業を内に含んで、この『艶史』が成立したのではなからうか。それにしても、『艶史』の作品を見ても、その作業の一つ一つが実に事に行われていることが分かる。特に肉付けの作業に於いては、共通部分の所で実際に見比べても分かるように、とても詳細な描写に富む生き生きとした文章になっている。従って、この様な作業を巧みに行った作者の文才は格別なものがあり、また文学作品的価値も非常に高いと言えよう。

四

以上、『艶史』に於ける『隋遺録』『海山記』『開河記』『迷楼記』の襲用について述べてきたが、『艶史』成立に關して、その内容について少し考察を加えてみたい。

『隋煬帝艶史』は、文字通り隋煬帝の誕生から死に至るまで様々な出来事を、彼を中心に据えて描いている。そして大運河開設など全体の二、三割は「艶」ならざる部分が存在してはいるものの、最初から最後まで「艶」っぽいイメージがつきまとう。思うに、これは作者にこの作品を「艶史」として読ませようとする意識があったのではなからうか。今、描かれている内容を題名に沿って見てみると開河の部分に、煬帝が宮中で夫人らと共に馬に乗る話（第二十二回前半「美女宮中春試馬」）が挿し挟まれている事が分かる。案ずるに、ここは「艶」とはかけ離れた話が連続する場面であり、「艶史」のイメージが薄れていく可能性が有る。従って、作者は敢えて此処に「艶」なる話を差し挟み、そのイメージを薄れないようにしたのではあるまいか。作者の意図は不明だが、最初の煬帝が即位するまでの場面や、煬帝の最期の部分なども同様で、作者の「艶」に対する配慮が窺えるのである。

この様に隋煬帝を語る文学作品に対し、『隋煬帝艶史』という「艶」という文字を使った題名を付けたのは、『艶史』にとつて「艶」という言葉が実に重要な意味を持っていると言ふ事に他ならない。笑痴子の「隋煬帝艶史序」には次のように述べられている。

是知問艶于四時，要不在于溽暑嚴寒也；徵艶于卉艸，要不在于蒼松勁栢也；乞艶于姿華，要不在于蓬蔕戚施也。

『隋煬帝艶史』に於ける『隋遺録』『海山記』『開河記』『迷楼記』の襲用について（河野）

故有驚而稱艷、喜而稱艷、異而稱艷、猶有妬而稱艷者。…(中略)…種種媚人、種種合趣、種種創萬禠之奇、種種無道學氣、無措大氣、亦無兒女子氣、并無天子氣者、則孰非可驚可喜、而稱艷者乎？訪問古今來、孰有如隋之煬帝者？

是知る、艷を四時に問ふに、要ず溽暑嚴寒（かから）に在らず、艷を卉艸に徴するに、要ず蒼松勁栢に在らず、艷を姿華に乞うに、要ず簾篠戚施（注：醜惡な人の喩）に在らざるを。故に驚きては艷と稱し、喜びては艷と稱し、異なりては艷と稱する有りて、猶ほ妬みて艷と稱する者も有り。(中略) 種種人に媚び、種種趣に合し、種種萬禠（注：萬年、或いは全世界を指す）の奇を創り、種種道學の氣無く、措大の氣無く、亦た兒女子の氣無く、並びに天子の氣無くんば、則ち孰れか可驚可喜にして、艷と稱する者にあらざらん。古今來訪問うに、孰れか隋の煬帝に如く者有らん。

即ち「艷」とは「溽暑嚴寒」、「蒼松勁栢」、「簾篠戚施」などの低劣で相応しくない所には存在し得ず、また「驚」、「喜」、「異」、更に「妬」という、感情の生動を「艷」と稱し、そして「媚人」、「合趣」などは「艷」なる人物の持つ特性である事が述べられている。此処に於いては煬帝こそ最大級の「艷」たる人物であり、実際にこの作品を読めば、彼の「艷」ぶりが見事なまでに分かるのである。この様に序文から『艷史』に於ける「艷」の持つ意義について、その一端を窺い知る事が出来る。もっともこの問題は、「艷」そのものについて、歴史的な使われ方などを始めとしてみっと多くの考察が必要である。紙幅の関係もあり、今回はこれ以上の言及はしないが、「艷」が重要な意義を持っている事は確かで、以後の研究で考えてゆきたい。

次に、この小説の持つ人情小説的一面について考える。『艷史』は煬帝と女性との絡みが多くの部分で述べられている関係から、男女の情愛について、その気持ちや行動のやり取りが実に多くの場面で語られている。そして『艷史』第三回から第五回に渡って、煬帝が父文帝の妃である宣華夫人に言い寄る場面に代表されるように、その描写はかなり細やかで生き生きとしているし、第三十四回で蕭后が嫉妬心を起こす場面などは現実味に溢れており、読者を惹き付ける魅力がある。この『艷史』は成立年代が『金瓶梅』と『紅樓夢』との間にあり、この二作品と人情描写について同列に並び称されるのは少々無理があるものの、これら人情小説の流れの中で『艷史』が何らかの

影響を受けて書かれ、そして他の作品に影響を及ぼした可能性は否定できない。少なくとも『艷史』が明清時代に於ける「情」をテーマとする小説作品中で、重要な地位を占めるのは確かであろう。

最後に、この『艷史』中で、煬帝は如何なる姿に描かれているのかについて述べてみたい。この作品に於いて、煬帝は風流的側面は見せているものの、やはり目立つのは悪玉たる姿である。しかも後世に多大な功績を残した大運河に関しても、その動機は江都行幸に際し、夫人たちを同行させるためという何とも許しがたい理由であり、これでは彼の業績として評価するのは全く不可能ということになる。また、この『艷史』中では、煬帝の事業によって人民が賦役に苦しむ描写も有り、煬帝の人物像を更に悪化させている。作者が何故このように悪印象を持たれるような煬帝像を描こうと思ったのか、その問題については、首に付された委蛇居士の「艷史題辭」にその一端を窺うことができる。

余友東方裔也。素饒俠烈、復富才藝。托姓借字、搆『艷史』一編。蓋即隋代煬帝事而詳譜之云。其間描寫情態、布置景物、不能無靡麗恣淫蕩心佚志之處、而要知極張阿摩之侈政、以暗傷隋祀之絕、暗傷隋祀之絕、還以明彰世人之鑒見。

余が友は東方が裔なり。素より俠烈に饒み、復た才藝に富む。姓を托し字を借りて、『艷史』一編を搆す。蓋し隋代煬帝の事に即きて詳らかに之を譜すと云う。其の間に情態を描寫し、景物を布置し、靡麗恣淫蕩心佚志之處無きこと能はず、而して知らしめんと要す、阿摩（注：煬帝の小字）の侈政を極張して、以て隋祀の絶を暗傷し、隋祀の絶を暗傷し、還た以て世人の鑒見を明彰せんことを。

即ち、『艷史』は隋煬帝故事に取材し、隋煬帝を「靡麗、恣淫、蕩心、佚志」（華美、淫乱、放蕩、逸遊）たる姿で描く事により、世人の鑑みる作品を目指したものとなる。従って『艷史』が目指した煬帝像は、これに沿えば決して善人にはなれないのである。そしてその意味に於いては、『艷史』中の煬帝は実に見事に反面教師役を演じており、この作品の成立の意図は大部分で達成されたといっても過言ではない。ただ物語の面白味といった面では、この煬帝は非常に興味深い人物と言える。権力を極め、女性を侍らせ、酒色に耽り、風流を楽しみ、大事業を興す。これらは当時も今日も、庶民の読者にとって夢のような世界であり、それを気の向くままに行つた煬帝を見ている

『隋煬帝艷史』に於ける『隋遺録』『海山記』『開河記』『迷楼記』の襲用について（河野）

と痛快ささえ覚える。すなわち隋煬帝のような人物はおよそ「艶史」と呼ばれる作品の主人公としては非常に相応しい人物と言えるのである。

おわりに

以上、『艶史』は『隋遺録』『海山記』『開河記』『迷樓記』と非常に関係が深く、また『艶史』成立に際してこれらの作品をもとに創作された可能性が高いことが明白になったと思う。そして作者はそれらの作品を襲用しつつも、様々な面で多くの手を加え、そして後世に対して悪い時代を映し出す鏡たる作品を目指し、隋煬帝を「艶」と捉えて彼の生涯を描き出そうという意識のもとでこの作品を創り出したのではなからうか。そして襲用の際に作者が行った作業は、非常に手の掛かるものでありながら実に見事に為されており、作者の才能の高さと作品創作に費やした精力の多さを想像させる。そしてその結果『艶史』は完成度の高いものとなり、一つの集大成たる作品として、隋煬帝を語る上で重要な位置を占めることになる。

そして、この様な襲用の仕方について、冒頭に挙げた隋唐時代を扱った講史小説の一つである『隋唐演義』に於いて、この『隋煬帝艶史』を初めとした幾つかの作品の襲用が見られるが、『隋唐演義』の『艶史』襲用は引き写しに近い形式であって、作者の手の入り方は『艶史』に比べると格段に少ない。この様に『艶史』と同時期には様々な襲用が盛んに行われていたと考えられるが、『艶史』の襲用の仕方はその中のひとつの形態として非常に興味深いものだといえるのである。

注

(1) 例えば鄭振鐸『挿図本中国文学史』に「『隋煬帝艶史』……組織了『海山記』『開河記』『迷樓記』諸文。」と。

(2) 今回使用した『隋煬帝艶史』のテキストは上海古籍出版社『古本小説集成』所収のものであり、該書は内閣文庫所蔵

の明人瑞堂刊本の影印本である。以下『艷史』の本文や序などの引用はすべてこれに拠る。

(3) 明・馮夢龍『醒世恒言』巻二四「隋煬帝逸遊召譴」。

(4) 大塚秀高編著『増補中国小説通俗小説書目』（汲古書院、一九八七）、『中国通俗小説総目提要』（中国文联出版公司、一九九〇）など参照。

(5) 今回使用した『隋遺録』『海山記』『開河記』『迷樓記』のテキストは上海古籍出版社『說郛三種』の百卷明鈔本『說郛』所収（それぞれ巻七八、三二、四四、三二）のものを用いた。これについては、『艷史』が成立したと思われる明末時代に最も纏まった形で手に入り易いテキストがこの百卷明鈔本『說郛』であると判断した。なおこれら四作品の詳細については魯迅『唐宋伝奇集』『稗辺小綴』などに譲る。

(6) 同じ隋煬帝故事に取材した作品として『海山記』『開河記』『迷樓記』が後人の手によって纏めて改編され、その結果同一人物の手によるものに見えてしまう事も十分考えられる。

(7) 此処に挙げられている故事の題名は筆者が便宜上勝手に付けたものであり、実際にこのような題名が書かれているわけではない。

(8) 具体的には「陳後主との出会い」、「玉李と楊梅」、「解生」の鯉」。

(9) 特に「長城の修築」については、『隋書』に拠れば、大運河開設の最中に行われている事が分かる。

(10) 欧陽健「隋唐演義」“綴集成帙”考（『文獻』一九八八年第二期）に、『隋唐演義』に於ける『隋煬帝艷史』『隋史遺文』『混唐後伝』の襲用に関する詳細な論考がある。

(11) 小松謙「隋唐をめぐる講史小説の展開について」（『中国古典小説研究』第一号、一九九五）に、興唐故事を扱った講史小説群の関係についての詳細な論考がある。

『隋煬帝艷史』に於ける『隋遺録』『海山記』『開河記』『迷樓記』の襲用について（河野）